

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：30127

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13939

研究課題名(和文)統合失調症患者の子育ての課題と精神保健福祉士の支援モデルに関する研究

研究課題名(英文)Childcare by Parents with Schizophrenia and a Support Model by Mental Health Social Workers

研究代表者

松浦 智和 (Tomokazu, Matsuura)

日本医療大学・総合福祉学部・准教授

研究者番号：90530113

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「統合失調症患者があたりまえの苦勞をしながら子育てを安心して行えるコミュニティづくり」を志向し、統合失調症を持つ親の育児の困難性や当事者の親(祖父母)の関わり、精神保健福祉士が抱える困難性の一端を検討した。殊に、当事者の親の関わりにおいては、親側が抱える「当事者の体調悪化への対応」「当事者のケアを含めた終わらない育児(感覚)」「家族以外の支援者の確保」などに課題があると思われた。また、精神保健福祉士が抱える困難性では、支援の目標設定や方法のありよう、担い手、関係機関の意識の低さや家族観に関わる項目で該当すると答える者が多くなっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで筆者が行った研究の結果も含めて、本研究で得られた結果は、ソーシャルワーカー(精神保健福祉士)のみならず、メンタルヘルズ課題を抱える当事者の育児支援に関わる医師や保健師、看護師、作業療法士などの共通認識の醸成につながると思われる。また、今後、各領域や様々な地域において同種の研究が行われ、本研究の結果が補完されることを期待する。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to "create a community where people with schizophrenia can raise their children with peace of mind while facing the normal difficulties," and examined some of the difficulties parents with schizophrenia face, the relationship with the parents (grandparents) of the patients, and the difficulties faced by mental health and welfare workers. In particular, with regard to the relationship with the parents of the patients, issues that parents face include "the deterioration of the patient's health," "continued childcare," and "securing supporters outside of the family." In addition, with regard to the difficulties faced by mental health social workers, many answered that they were related to the setting of support goals and methods, the low awareness of those providing support and related institutions, and the view of family.

研究分野：社会福祉学

キーワード：統合失調症 育児 子育て 精神保健福祉士 支援

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

先行研究では、恋愛・結婚・子育てには統合失調症当事者や家族の人たちの強い関心や希望があり、リカバリーにつながる体験としているとする一方で、その実態は厳しく、当事者や家族にあきらめがあり、専門家の中にも悲観論や関わろうとしない無関心があることを指摘している。統合失調症患者が結婚・妊娠・出産を望んでいるものの、「自己決定」をソーシャルワーカーが支援できていない現状は看過できないものがある。

そもそも、統合失調症患者の子育てに関しては、子育てをしている統合失調症患者の実態が明らかになっていない。たとえば、統合失調症圏の女性患者の3~4割に出産経験があるという報告がある一方で、全国精神保健福祉会連合会が2010年に実施した調査(N=1492)では、婚姻関係にあるものはわずか8%、そのなかで子どもがいるものは72%であるが、自分で育てているのは38%であり、支援モデルを検討する上ではその実態を明らかにすることは急務である。また、これまで、筆者が取り組んできた研究のなかでは、統合失調症患者の子育てにおいては、母親、子どもたち双方のインタビュー結果から、「子どもと祖父母の関係性」に着目する必要性が明白であった。この点はソーシャルワークの支援対象論の検討からも、その関わりの実態も明らかにする必要があった。

2. 研究の目的

本研究の目的・関心は、統合失調症患者が子育てを行う上で抱えている課題を明らかにし、支援のあり方をソーシャルワークの視点から検討することにある。もとより、ソーシャルワーク領域において「統合失調症患者」「子育て」「支援」などをキーワードとする先行研究は少なく、殊に、筆者の問題意識は「統合失調症患者があたりまえの苦労をしながら子育てを安心して行えるコミュニティづくり」に集約される。本研究では、統合失調症患者の子育ての課題について、これまで筆者が当事者へのインタビュー調査(公益財団法人前川財団平成27年度、28年度助成)から検討してきた項目を追加調査により妥当性を検討するとともに、これまでの先行研究でも指摘されていない当事者の親(祖父母)と当事者の子(孫)の関係性にも着目し、新たなインタビュー調査を試み、コミュニティづくりも含めた精神保健福祉士の支援モデルの検討を行うこととした。さらに、その過程では、支援者(殊に、精神保健福祉士)へのインタビュー調査を通じて、支援の困難性やその内容についての把握も試みた。

3. 研究の方法

本研究では、先に述べた目的・関心を達成すべく以下の調査を実施した。新型コロナウイルス感染拡大防止措置が求められたことにより、予定していたスケジュールは大幅に変更となった。

1次調査「統合失調症患者の子育てにおける祖父母の関わりに関する調査」(2019-2021年度)

調査方法はインタビュー調査とし、内容は基本属性、祖父母の生活歴、祖父母の子育て経験、子(統合失調症患者)の子育てで苦労したこと、孫の子育てへの参加状況、孫の子育てで苦労していること、養育の中で大切にしていること、将来への不安・展望の8項目である。対象は、これまでの研究で協力の意向が示された者を中心とした3名の統合失調症患者とその子ども、患者の両親(本研究が「祖父母」と表記する者)である(居住地はそれぞれ北海道内と中部地方である)。

2次調査「統合失調症患者の子育ての支援に関するソーシャルワークの介入方法に関する調査」(2021-2023年度)

1次調査の結果を踏まえ、北海道内の精神科医療機関・障害福祉サービス事業所のソーシャルワーカー(精神保健福祉士)10名(うち1名は調査依頼時には北海道在住であったが実施時には関東に居住)を対象に、統合失調症患者の子育てと家庭教育に関する支援の現状と課題についてインタビュー調査を実施した。さらに、複数の調査対象者からの助言があり、発達障害を持つ当事者の支援を行う精神保健福祉士(先述の10名とは別)へのインタビュー調査も実施することができた(対象者10名)。

ともに、筆者の前所属機関である名寄市立大学倫理委員会の審査を受け、実施の承認を得た(19-049)。また、一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規程」ならびに「日本社会福祉学会研究倫理規程にもとづく研究ガイドライン」を遵守して研究を実施した。さらに、対象者には、関係学会等での報告や論文等の許諾を得ている。本研究の実施に際し、開示すべき利益相反関連事項はない。

4. 研究成果

(1)1次調査の結果

インタビュー調査の回答者は3組5名であり、子ども(当事者)の疾患は3名とも統合失調症であった。

「 祖父母の基本属性」については、60代夫婦が1組、70代ひとり親が1組、70代夫婦が1組であり、全員が当事者にとって実父母であった。

「 祖父母の生活歴・子育て等」では、3組の当事者は全員が10代に統合失調症を発症しており、夫婦の回答者2組においては、祖父はほとんど子育てには参加せず、専業主婦である祖母が担っていた。

「 子育てで苦労したこと」では、「発症にもっと早く気付くべきであった」「当事者との関係づくり」「当事者を支えることにおいて子育てが終わった感じがしない」「病気のことがよくわからなかった」「結婚する前に妊娠したので驚いた」「妊娠を責めたことを後悔している」など多岐に渡った。

「 子育てへの参加状況」では、「すべてを担うので子育てである」「病気の当事者の子育ても続けている」「当事者が体調不良になると預かる」「当事者が働いているので基本は毎日一緒」「体力的に辛い」などの声が聞かれた。

「 子育てで苦労していること」では、「当事者の入院期間が体力的に辛かった」「当事者が幻覚に苦しむ時期は今も定期的にあるため、何かの形で孫に暴力的に関わることがないか心配」「祖父母になついている孫をおもしろくは思っていない」「母親が仕事をしていることもあり孫が寂しそうな顔をする」「子は仕事が忙しくなると調子を崩しがちになる」「出産直後に入院になり、孫がしばらく母親がいない状態が続いたのでそうならないように注意している」「当事者は年に1-2回、1-2か月程度の入院をしている。入院期間が長いと、孫が祖父母になつきすぎてしまい、過剰に甘やかすきっかけとなる」「孫が親の病気について知りたがっており、どのように説明すればよいか分からない」など、統合失調症患者ゆえの要因が多くなっていた。

「 養育の中で大切にしていること」では、「とにかく、家事や育児は当事者がやることを前提に考えている」「それでも母親が体調を崩せば、祖父母が面倒を見ざるを得ないため、なるべく日頃から母親と育児に関する情報や方針を共有するようにしている」「祖父母も体力的に育児は結構辛いが、一番辛いのは統合失調症を持っている母親であり、その母親が時々入院で不在にされてしまう孫だと思わしている」「母親には、子育ても大事であるが、友人や仲間と過ごす時間も大切にしてほしいと思っている」「いずれ祖父母がいなくなった際には頼れる人を増やしてほしいので、自由な時間が確保できるように配慮している」「なるべく、孫のお願い事などは母親を通させるようにしている」「病気のことは隠さずに聞かれたことは答えるし、母親がどれだけ頑張っているかを伝えるようにしている」「孫が、友達の家や家族のエピソードなどを話すと、母親と孫で空気が悪くなる時があるが『よそはよそ、うちうち』とよく言い聞かせている」「子が体調を崩すと孫は非常に悲しい顔をする。結局は、子が体調管理をしっかりしていけば孫の安心につながることを知った」「子が孫の行動を制限する(遊びに行かせないなど)ことがあるので、なるべく、同年代の子どもたちと交流できるようにとは考えているが、実際には学校以外で何をすればよいのかはよくわからない」など聞かれる声は多岐に渡り、何をどのように大切にすればよいのか戸惑いが聞かれた。

「 将来への不安・展望」では、「まだ孫が幼稚園なので、病気のことも育児がスムーズにいかないことも家庭内の問題であるが、いずれ小学校、中学校と成長していくなかで、母親の病気のことを上手に理解してくれるのが心配」「そして、その頃には祖父母も体力的に衰えてきていると思うので、逆に母親や孫の力を借りることもあるかもしれない。そのような時に母親の病気が落ち着き、孫が健やかに育ってほしい」「今は母親が通院している病院の看護師やソーシャルワーカーが気遣って声をかけてくれるが、このまま頼り続けてよいものか、自立できるように何か準備しなければならないのがよくわからない」「祖母もひとりで子を育ててきたのであまり心配はしていない。母親が入院するたびに『自分の育て方が悪かったのか』と悲しい気分になる」「病院の医師やソーシャルワーカーがいつも話を聞いてくれてすぐに落ち着くが、母親の調子が崩れる度に自分も気持ちが滅入るのは自分で心配している」「今は孫の世話で気を張っているので乗り切っている」「あまり考えないようにしている。親亡き後の問題はわかっているが、学校の教員や病院のソーシャルワーカーともたくさん話し、親としてできることを可能な範囲でしようと思っている」「住むところと経済的な支援ができるように準備はしている」「できることならば、パートナーを見つけて、一緒に子育てをしてくれる人を見つけてほしい。長子に負担がかからないかという心配はある」など、子どもや孫を心配する声が多い一方で、支援者との関係やきょうだいへの配慮なども見られた。

(2)2 次調査の結果

表1は統合失調症圏患者と発達障害圏患者それぞれについて精神保健福祉士の支援に関わる上での困難性を示したものである。は8名以上の回答者が指摘したもので、○は半数程度、は1~2名、×は指摘がなかったものである。各項目については、先行研究を参考に設定し、今回のインタビュー調査結果で得られたものも加えている。

全22項目について、統合失調症圏と発達障害圏の当事者支援においては、支援の目標設定や支援方法のありよう、支援の担い手に関わる項目で該当すると答える者が多くなっていた。さらに、関係機関の意識の低さや議論がなされない土壌、家族観についても困難として挙げる者が多

くなっていた。その他では、統合失調症圏と発達障害圏の支援では、困難性が異なる可能性も示唆される結果となった。

表1 精神保健福祉士の支援の困難性

項目	統合失調症圏	発達障害圏
回答者数	10名	10名
居住地域	北海道, 関東	北海道, 東北, 関東
支援の困難性(支援体制に関わるもの)		
支援の目標設定が難しい		
支援の方法に決まったものがない		○
子育ての支援は誰が行うのかが不明		○
支援者の価値観を押し付けていないかが不安	○	○
介入のタイミングが不明	○	×
援助希求が少ない	○	○
関係機関の連携が難しく, 誰が声をあげるかが不明		
配偶者・親などの支援参加による意見不一致が頻発する		
育児能力を判断するツールがない	○	
子育て経験のある専門職に頼り切っている現状がある		
同職種・他職種とも支援理念の対立が起こる	○	
何をもちて親子の生活能力を判断するのが不明	○	
当事者の主張が強く, 支援に関する提案を聞き入れない		○
当事者のこだわりが社会一般の感覚とずれている		○
主訴が不明		
支援の困難性(制度・サービスに関わるもの)		
障害福祉制度・サービス体系が子育て支援になじまない		
制度・サービス体系が初歩的		○
親子を同時に支援することが難しい		○
支援の困難性(専門職に意識に関するもの)		
関係機関の意識の低さ		
支援者がこの話題について積極的に議論したがない土壌がある		
①支援者の家族観が分かれる		
②子育ての大変さを理解できない支援者がいる		○

(3)小括

当事者が抱える困難性、祖父母の孫育てと苦慮

孫育てを担う祖父母の概況、医療による統合失調症患者の妊娠・出産のリスクの評価、統合失調症の親に養育された子の思い、児童虐待予防の視座を検討し、本研究の被験者から得られたデータを概観したとき、統合失調症患者の妊娠・出産の困難は明白で、どれだけ母親にリカバリーや自己実現という視点を加味しても、本人の疾病管理、祖父母等の家族の負担など、現実の後押しするに足る理論的背景を見出すことは難しい感がある。さらには、元来ある「親の自覚」「親の資質」などを基調とする「良い親でなければならない」というような、社会が親になる者に求める“自立”・“自律”観も統合失調症患者の妊娠・出産を阻むものと思われた。

本研究のインタビュー調査の結果では、いくつかの支援の方向性が示唆された。

まず第1に、当事者の病状悪化による“育児の離脱”をどのようにフォローするかという点である。入院に限らず、病状が悪化した際に、数日では済まない離脱期間があり、この間は、祖父母の育児負担に加え、親子関係の不安定さへの危惧、子どもの価値意識の形成に大きく影響を与える可能性と、実態はななくともそこに危機感を感じる当事者像が見えた。

第2に、「子育てが続いている」と感じる祖父母の声にどのように応えるかということである。祖父母にとっては子どもと孫の支援が並行する実態は、実際の負担と負担感の大きさは容易に想像できる。さらに、同居・近居を選べばなおそれが続くため、未来への不安感は大きくなるものと推測できる。そして、その関わりの質・量を祖父母側が選択できない事実がある。

第3に、陳腐な表現であるが、家族以外の支援体制の構築である。やがて、祖父母なき後にどのように備えるかという点において、どの領域がどのような関わるができるのかということについて、制度・サービスの視点よりも専門職個人の価値観に左右されている可能性がある。

かつて、筆者は大学病院で精神科ソーシャルワーカーとして勤務していたが、大学病院は総合病院であり産科も精神科もあることから、精神疾患を持つ当事者の妊娠・出産をサポートする場面が多々ある。また、そのような人々からの拳児に関する相談を受けることも少なからずあった。その度に、両科で情報を共有し、支援の方向性を当事者も入れて相談したものである。

私心であるが、医療機関のスタッフの中にも、統合失調症患者の妊娠・出産には消極的な者もいる。しかし、それ以上に筆者が案じているのは、行政機関や地域生活支援を担う支援者たちの否定的・消極的理解であったことである。医療機関のスタッフ以上に、地域の資源の限界やこれまでに育児をしてきた統合失調症患者の苦悩や苦勞を知っているそれらの人々の言葉は重く、医療機関で拳児希望者をサポートしても、行政や地域生活支援を行うスタッフの話聞いて諦めるということが少なくなかった。そのような経験を重ねていくと、「統合失調症患者は妊娠・出産は無理」というイメージが着実に浸透していく。統合失調症患者の妊娠・出産を考えると、当事者や周囲の人々が抱くマイナスイメージの精査から始めなければならないという壁にぶつかる。

精神保健福祉士の支援モデル

本報告において、精神保健福祉士の支援モデルを具体的に示すまでには至らないが、今後、本研究では、精神保健福祉士の支援モデルを検討する要素として、「シームレスな生活支援」を中心に据えていく予定である。これは、理念、担い手、制度をすべて包含している事項である。また、職種の垣根を超えて考えていく必要がある。

より具体的に示せば、北海道十勝地方でソーシャルワーク実践を行ってきた小栗静雄氏は、精神障害をもつ人々が地域生活を送る際には、「意」「医」「食」「職」「住」「友」「遊」が保障されているかが重要であると指摘している。自分の「意」思で決めること、良質な「医」療があることなどの7つの要素であり、単に衣食住だけに終始しない包括的な支援の必要性を示している。自身の実践を振り返れば、保護的・治療的・教育的な関わりをしてきたことも否めず、エンパワメントやストレングス視点を多分に包含した支持的なアプローチが行われる必要がある。これらに関わって、「ピアサポートの構築」や「リカバリーへの伴走」「ソーシャルアクション」の意味や価値も再考していく予定である。陳腐な表現であるが親が、「周囲の応援がある」「仲間がいる」「地域には支援者がいる」「寄り添ってくれる人がいる」という気持ちを持って育児ができる環境の重要性が一連の研究で改めて示唆されていることによる。

本研究では、支援者の困難性を検討したが、見方を変えれば、「苦手意識」に着目したともいえる。結婚・出産・育児・家族等の考え方は時代とともに移り変わるものであり、多様性を重んじる現代において、どこか積極的に触れづらい、正解がわからないので支援に踏み出しづらいと考えているようにも思われた。そして、このことは、支援者ひとりの思考のなかで解決するとは到底思えない。

そもそも、育児が難しい時代となっていると指摘する声もある。仕事との両立や育児に取り組める時間の不足、インフォーマルサポートの不足、インターネット上の育児に関する情報の取捨選択の難しさなど現代的な課題は尽きない。これらに対して、「育児に正解はない」という言葉も投げかけられるが、これらの言葉は、困難に直面している人の“信念”として定着するのは容易ではない。少なくとも、社会や地域全体のゆとりのなさに起因する育児困難や支援の困難があるのであれば、ソーシャルワークはソーシャルアクションの視点を持って積極的に介入する。これらの過程では、多領域かつ学際的なアプローチを欠くことができず、医学や保健学、看護学や作業療法学、心理学、教育学などの各領域との連携・協働が不可欠であろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 松浦 智和	4. 巻 12
2. 論文標題 統合失調症患者の育児への祖父母の参加と支援体制に関する試論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 名寄市立大学社会福祉学科研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松浦 智和	4. 巻 11
2. 論文標題 統合失調症患者の育児への祖父母の関わりに関する試論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科研究紀要	6. 最初と最後の頁 11-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------